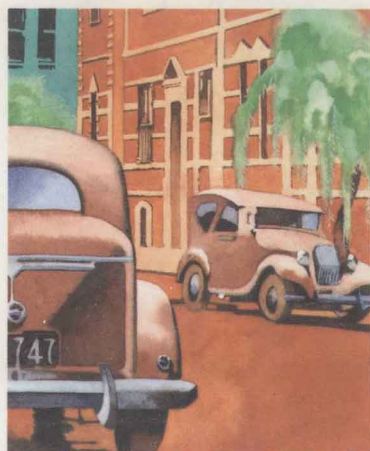


とむらい機関車

大阪圭吉



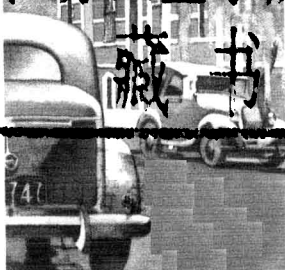
国書刊行会

探偵クラブ
detective club collection

とむらい機関車

大阪圭吉

江苏工业学院图书馆
藏书章



国書刊行会

探偵クラブ

とむらい機関車

一九九二年五月二〇日初版第一刷印刷

一九九二年五月二五日初版第一刷発行

著 者 大阪圭吉

装 幀 高麗隆彦

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八
電話〇三(三九一七)八二八七 振替東京五―六五二〇九

印刷 株式会社キャップス・セイユウ写真印刷株式会社
製本 大口製本印刷株式会社

ISBN4-336-03361-7 © Sotaro Suzuki 1992

デパートの絞刑吏

死の快走船

気狂い機関車

とむらい機関車

燈台鬼

闖入者

三狂人

白妖

188

166

146

125

97

73

24

7

とむらい機関車
目次

あやつり裁判

212

銀座幽霊

231

動かぬ鯨群

251

寒の夜晴れ

274

坑 鬼

294

幽霊妻

338

論理派ミステリーの先駆者

鮎川哲也

353

とむらい機関車

デパートの紋刑事

多分独逸物であつたと思うが、或る映画の試写会で、青山喬介——と知り合いになつてから、二ヶ月程後の事である。

早朝五時半。社からの電話を受けた私は、喬介と一緒にRデパートへ、その朝早く起つた飛降り自殺のニュースを取るために、フルスピードでタクシーを飛ばしていた。

喬介は私よりも三年も先輩で、かつては某映画会社の異彩ある監督として特異な地位を占めてはいたが、日本のファンの一般的な趣向と会社の営利主義とに迎合する事が出来ず、映画界を隠退して、一個の自由研究家として静かな生活を送っていた。勤勉で粘強な彼は、一面に於て、メスの如く鋭敏な感受性と豊富な想像力を以てしばしば私を驚かした。とは言え彼は又あらゆる科学の分野に互つて周到な洞察力と異状に明晰な分析的智力を振り込んだ大なる価値深い学識を貯えていた。

私は喬介とのこの交遊の当初に於てその驚くべき彼の学識を私の職業的な活動の上に利用しようとたくらんだ。が、日を経るにつれて私の野心は限りない驚嘆と敬慕の念に変わって行つた。そうして間

もなく私は、本郷の下宿を引き払って彼の住んでいるアパートへ、しかも彼と隣合せの部屋へ移住してしまつた。それ程この青山喬介と言う男は、私にとって犯し難い魅力を持っていたのである。

六時十分前に、私達はRデパートへ着いた。墜死の現場はこのデパートの裏に当る東北側の露路で、血痕の凝結したアスファルトの道路の上には、附近の店員や労働者や早朝の通行人が、建物の屋上を見上げたり、口々に喧ましく喋り合つたりしていた。

死体は仕入部の商品置場に仮收容され、当局の一行が検死を終つた処であつた。私達が其処へ這入つて行くと、今度〇〇署の司法主任に榮進した私の従兄弟が快く私達を迎えながら、この事件は自殺でなく絞殺による他殺事件である事、被害者はこの店の貴金屬部のレジスター係で野口達市と言う二十八歳の独身店員である事、死体の落下点附近に幾つかのダイヤの混じつた高価な真珠の首飾が落ちていた事、そしてその首飾は、一昨日被害者の勤務せる貴金屬部で紛失した二品の内の一つである事、更に又、死体及び首飾は今朝四時に巡廻中の警官に依つて発見されたものなる事、そして最後に、この事件は自分が担任している事を附け加えて、少々得意気に話してくれた。説明が終ると、私達は許しを得て死体に接近し、罌粟の花の様なその姿に見入る事が出来た。

頭蓋骨は粉碎され、極度に歪められた顔面は、凝結した赤黒い血痕に依つて物凄く色彩られていた。頸部には荒々しい絞殺の瘡痕が見え、土色に変色した局部の皮膚は所々破れて少量の出血がタオル地の寝巻の襟に染み込んでいた。検死のために露出された胸部には、同じ様な土色の蚯蚓腫れが怪しく斜に横たわり、その怪線に沿う左胸部の肋骨の一本は、無惨にもヘシ折られていた。更に又、屍体の所々——両方の掌、肩、下顎部、肘等の露出個所には、無数の軽い擦過傷が痛々しく残り、タオル地

の寝巻にも二、三の綻ろびが認められた。

私がこの無惨な光景をノートに取っている間、喬介は大胆にも直接死体に手を触れて掌中その他の擦過傷や頸胸部の絞痕を綿密に観察していた。

「死後何時間を経過していますか？」

喬介は立上ると、物好きにも側にいた警察医に向ってこう質問した。

「六、七時間を経過していますね」

「すると、昨晚の十時から十一時までの間に殺された訳ですね。そして何時頃に投げ墜されたものでしょう？」

「路上に残された血痕、又は頭部の血痕の凝結状態から見てどうしても午前三時より前の事です。それから、少くとも十二時頃まではあの露路にも通行人がありますから、結局時間の範囲は零時から三時頃までの間に限定されますね」

「私もそう思います。それから被害者が寝巻を着ているのは何故でしょうか？ 被害者は宿直員ではないのでしょうか？」

喬介のこの質問に警察医は黙ってしまった。今まで司法主任に何事か訊問されていた寝巻姿の六人の店員の一人が、警察医に代って喬介の質問に答えた。

「野口君は昨夜宿直だったのです。と言うのは、各々違った売場から毎晩順番の交代で宿直するのが、この店の特種な規則と言いますかまあキマリになっているのです。昨晚の宿直は、店員の中ではこの野口君と私と、其処に立っている五人と、都合七人でした。それから雑役の人夫さんの方で彼処にいる三人を加え、全部で十人の宿直でした。そんなわけで同じ宿直室へ寝ながら、宿直員の中ではお互

に馴染の少い顔ばかりと言う事になるのです。昨晚の様子ですか？ 御承知の通り只今では毎晩九時まで夜間営業をしていますので、九時に閉店してからすっかり静かになるまでには四十分は充分に掛ります。昨晚私達が、各々手分けをして戸締りを改めてから消燈して寝に就いた時は、もう十時に近い頃でした。野口君は、寝巻に着換えてから一人で出て行かれたようですが多分便所へでも行くのだろうと思って別に気にも留めませんでした。それから今朝の四時にお巡りさんに起されるまでは、何にも知らずにぐっすり眠ってしまったのです。……ええ、宿直室は、人夫さん達のが地階で、私達のは三階の裏側に当たっています。六階から屋上に通ずるドアですか？ 別に錠は下しません」

この宿直店員の供述が終ると、喬介は他の八人の宿直員に向つて、昨晚の事に関して今の供述以外のニュースを持っている人はいないかを質問した。が、別に新しい報告を齎らした者はなかった。ただ、子供服部に属していると言う一人が、昨晚は歯痛のために一時頃まで眠られなかった事、その間野口達市のベッドが空である事には少しも気が附かなかった事、怪し気な物音などは少しも聞えなかった事等、一寸した陳述をなしたに過ぎなかった。

次に首飾に関する喬介の質問に対して鼻先の汗をハンカチで拭いながら、貴金屬部の主任が次の様に語った。

「只今知らせを受け驚いて出勤したばかりです。野口君はいい人でしたが残念な事をしました。決して他人から恨みを受ける様な人ではありません。首飾の盗難事件ですか？ どうも野口君に限つて首飾とは関係ないと思いますね。とにかく首飾は一昨晚の閉店時に紛失したのです。これこれ二品です。合せて丁度二万円の代物です。で当時の状況から推して確かにお客さんの中に犯人が混じっていたと思われまゝ。従つて貴金屬部の店員は申すに及ばず、全店員の身体検査をするやら建物の上から下ま

で細密な搜索をするやら、いや全くこの一面日は大騒ぎでした。それがこの始末です。全く不思議です」

丁度主任の供述が終った時、屍体の運搬車が来て、三人の雑役係の宿直人夫が屍体を重そうに提げ、臆病そうにヨタヨタした足取りで運び出して行つた。その様子を暫く名残り惜し気に見詰めていた喬介は、やがて振り返るや私の肩を叩きながら元氣よく叫んだ。

「君、屋上へ行こう」

もう開店時間に間もないと見えて、どの売場でも何時の間に出勤した大勢の店員や売子達が、商品の上に覆われた白更紗のシートを畳んだり、新しい商品を運んだりして忙しく立働いているのをエレベーターの中から見渡しつつ間もなく私達は屋上へ出た。今までの陰惨な気持を振り捨てて晴れ渡った初秋の空の下に遠く拡がる街々の薨を見下ろしながら、私は深い呼吸を反覆した。

喬介は、被害者野口が墜されたと思われる東北側の隅へ歩み寄り、腰を屈めてタイル張りの床を透かして見たり外廊を取り繞る鉄柵の内側に沿う三尺幅の植込みへ手を突込んで、灌木の根元の土を掻き廻す様に調べたりしていたが、間もなく複雑な気色を両の眼に浮べながら、西側の隅で虎に餌を与えている番人の姿や、東側の露台の上で気球係の男が軽気球の修繕をしている景色に見惚れていた私に向つて、静かに声を掛けた。

「君、虎を見ているのかね。我々も一つ餌にありつこうじゃないか。……こいつはなかなか面白い事件だよ」

もう喬介は歩き出した。とうとう喬介はこの事件に乗り出してしまったな、と思ひながらも、底深

い好奇的な魅力に誘われた私は、喬介に従って六階へ降りた。其処で私は電話室に這入り、新聞記者としての私の職責を果たすために社への一通りの報告を済ますと、喬介に連れ立って食堂へ出掛けた。

流石に朝の内と見えて、食堂の内部はひっそりしていた。ただ、隅の窓に寄ったテーブルの一つに、司法主任と彼の部下の一人とが、分厚なサンドウィッチに嚙り附いていた。彼は私達を見附けるや、立上って同じテーブルへ椅子を取り持つてくれた。私達は快くその椅子に着いた。給仕が私達の註文を取り来ると、華奢な鉄格子の填った窓を見ていた喬介は、その少女を捕えて、何階の窓にも一樣に鉄格子が填っている、と言う事実を確めていた。

やがて私達の食事が始まると、熱い紅茶を啜りながら司法主任が喋り出した。

「事件は複雑ですが解決は容易ですよ。私は実地検証主義ですからね。それですな——勿論、殺人は昨晚の十時から十一時までの間で行われ、今朝の零時から三時頃までの間に屋上から投げ墜されたものです。この時間と言ひ、戸締りが嚴重で外部から侵入の余地がない点と言ひ、犯人は明かに店内の者です。いいですか、一層はつきり言えばですね、昨夜この店内にいた者と言ひ、勿論これはあなた方にだけ申上げるのですが、これから昨晚の宿直員を全部徹底的に調査します。ただ、ここで少し困難を感じる問題は、首飾の一件です。もしも首飾を盗った犯人が野口を殺害したものとすれば、何故犯人は首飾を遺棄したか？　もし又首飾を盗った者を被害者自身とすれば、殺人の動機はどこにあるか？　しかしこれらの問題を解決するためには、私は先ず首飾の指紋を検出して見ますよ。では、ご緩り——」

司法主任は、元氣な挨拶を残し、部下の警官を従えて食堂を出て行った。

今まで無言で食事をしていた喬介は、その口元に軽い微笑を浮かべながら初めて口を切った。

「あの人は君の従兄弟と言ったね。ま、いいや、一体に日本の警察は、犯罪の動機を真つ先に持ち出したがるよ。だからたとえそれが皮相的なものにせよ今度の事件の様に一見動機の不可解な犯罪に逢着すると、直ちに事件そのものを複雑化してしまう。勿論、動機の探求結構さ。ただ、動機を以て、犯罪探偵の唯一の手掛であると考えたがる単純な公式的な頭脳に対して反駁したいのだ。早い話が、この事件に於て、我々はあの真珠の一件よりも、死体そのものに見られる三つの特徴の方が大事だ。第一に、頸部の絞殺致命傷並に胸部の絞痕——最初私はこの傷を鞭様の兇器で殴り附けたものと感違ひした——に与えられた暴力が、非常に強大なものなる事。第二に両手の掌中に残された横線をなす無数の怪し気な擦過傷。その中には幾つかの胼胝も含まれる。第三に、肩、下顎部、肘等の露出個所に与えられた無数の軽い擦過傷。と、まあこの三つだね。

先ず与えられた第一の手掛を分析検討して見よう。すると直ちに私は、犯人は数人又は非常に強力な一人の人間である、と言う推定に達する。同様にして、第二の手掛である掌中の擦過傷は、被害者が何物かを握り締めて摩擦さしたと言う事実を明確に暗示する、次に、第三の手掛である所々の軽い擦過傷を検討して見よう。軽薄ではあるが太く荒々しいあの瘡痕は、明かにナイフその他の金属類に依つて与えられたものでなく、鈍重で粗雑なものであり、且つ又掌中に擦過傷を与えた兇器或は同性質の兇器なる事を暗示する。そうしてこの事は、あの種の擦過傷を与える様なその物体が、犯行の当時現場に、もつと厳格に言えば格闘している被害者の身辺に、あつたか、或は、直接犯人が持つていたかのどちらかだ。が、この場合私は後者だと思う。何故なら、加えられた力の量的な差こそあれ、これらの擦過傷はあの頸部胸部の絞殺瘡痕に対して質的な共通点を持つてゐるからだ。君はあの土色に変色した皮膚が擦り破れて、出血してゐた被害者の頸部を思い出し給え。そうして極めて幼稚な観

察と推理に依つてすら、頸部に索溝の残っていない点と言ひ、あの皮膚の擦り破れ方と言ひ、第二第三の擦過傷を与えたと同じの太く粗雑な兇器である事は容易に頷き得る筈だ。

従つて私は、これらの個々の事実の検討から、私の分類した三つの瘡痕に加えられたそれぞれの兇器が、犯行に使用された唯一の兇器である事に帰納する。だから被害者の持つていたあの幾個所かの擦過傷は格闘の際現場に転つていた奇妙な物体に依つて外部的に受けたものではなくて犯人の手から執拗に襲ひ掛つて来る蛇の様な兇器に依つて与えられたものののだ。だが、推理を今後の過程に進めるに當つて最も興味深い存在をなすものは、あの掌中に残された奇怪極まる擦過傷だよ。まさか君は死人が綱引き遊びをしていたなんて言うまいね。

次に、あの無数の軽い擦過傷が明かに格闘に依つて与えられた軽傷である事は、まさしく疑う余地がない。しからば格闘は、従つて犯行は、何處で行われたか？ 勿論、屋外であれ程判然たる他殺の痕跡を加えて殺害したものを、わざわざ運び込んで屋上から投げ墜し墜死に見せかけよう、なんてナセンスは信じられない。しかもこの場合嚴重な戸締りの問題がある。しからば次のデパートの屋内で犯行が行われたとの解釈はどうか？ この解釈が肯定されるためには、被害者が殺害されるまでの格闘の際、一言の救助をも求めなかつた、と言う驚くべき事実だ。従つて犯行は最後の場所、即ち屋上で行われた事になる。この考え方は確かに平凡である。警察も同感だろう。が、同じ同感でも私はその断定を下すまでに少くとも他の一、二の問題を明かに否定している。例えば先程私は被害者の絞殺致命傷の特徴からして、犯人は数人又は非常に強力な男と断定した。がこの内の「数人の犯人」は、以上の私の検討に依つて既に否定されている。ああ言う組織の宿直員の中では、まず共謀と言う事は成立しないからだ。従つて犯人は力の強い一人の男と言う結果に達着する。その強力者とは誰だ！